

豊かめの「STAJAN」―原発を認めてきた時代と私たち―

長田浩昭（真宗大谷派法傳寺住職）

共にあるよさを失いつつ姿

能登半島の最先端に関西電力 中部電力が原発の新規立地を進める、人口二万人の珠洲市がある。一九八九年四月、原発誘致を争点として推進派一人、反対派二人が立候補した市長選挙は、現職の推進派が勝つたものの、原発を支持した票が過半数を獲得した。誰もが「これで原発の推進はな」と思っていたその一月後、関西電力が立地予定地 高屋町での立地可能性調査を強行する。それ以降、住民による高屋町での阻止行動、市役所での座り込みが四十日間続いたとして続けられることとなる。

その渦中において、市役所に座り込みを続ける反対派住民の一人が、日本の原発は安全です」と繰り返すばかりの市の助役に質問をした。あなたは、原発労働者の実態を知っているのか？」と質問に対して、その助役は「そんな危険な仕事は、珠洲市民以外の者にやらせよう」といって「心配なく」と発言した。その時、それでも人間か？」と叫んだ珠洲市の多くの人々が騒然とした中で、何が問われているのか分からないという困惑した助役の姿があった。

彼がどれほど被曝労働の具体的現実を知っていたかは定かではない。しかし、市民から被曝労働者の実態を厳しく問いかげられた時、危険な仕事」と十分察知し得たであろうし、だからこそ市民以外の人」といって「と納得してしまえばなるほどだ」と判断したに違いない。人間としての責任が問われたひとつの出来事ではあるが、原発を推進する人々に共通して表れる姿であるように思う。

同じ頃、立地予定地の高屋町における阻止行動では、調査のためには

て来た関西電力の作業員と住民が対峙している中で、やがて関西の電力会社が、能登半島のこんな先端まで来て、発電所を作らなければならぬのか？」と尋ねた老婆は、その作業員は悪意のないソフトな笑顔で直剣に対応した。それは、おばあちゃん、人の多い大阪に原発を作ってもいいものがあつたら大変なことになるのがわかるやろ」といってのものであった。珠洲に住んでいる人間をモノのように扱って、それでも人間か？」と烈火のごとく怒った老婆の前で、やはり何に怒っているのか見当もつかず、ただキョトンとしている関西からやって来た企業の若い作業員の姿があった。さらには、珠洲市の原発誘致の実態を伝えたNHKの特集番組「原発立地はこうして進む」(一九九〇年五月二十二日放映)の中で、予定地の買収を進める関西電力の立地部長は、自分たちの仕事の内容を、私は物を買った、土地を買ったりするんじゃない。私は、人の心を買った」とテレビカメラの前で堂々と語った。人間に対するこれほどの侮辱があつたか、人間を人間として見ない限り、自らの人間性を失いつつ、「この道理に気がつかない」とこそ、天の内実があり、そこに原発というものの本質が現れたのだと思う。

原発立地には三つの条件が必要と地元では説明されている。それは、強固な地盤、広大な敷地、住民合意である。しかし、それらは何度繰り返しても、その背景に「原発」という問題が当然のものとて済ませられてきた。過疎地、辺境の切の棄てと「生かざる人間への蔑視が横たわっている。」

『雑玉蔵経』という經典には、共命鳥という鳥の物語がある。共命鳥とは、体が一つで頭と心が二つある鳥である。その一方の頭が土を独占しながら言い争い、その原因をお前が従わなかつた」とも、一方の頭をなじるのであった。そして、なじられた頭がお前なんか殺してやる」と興奮して、体が一つしかないことを忘れ、毒草を食べ、結局両

方が死んでいくという物語である。先の原発を推進する人々の姿はまさに、死んでいった共命鳥の物語であり、その共命鳥が極楽浄土に生まれたいとて、説く『阿弥陀経』は、共にあるよさを失い原発を認めていくよすがな生き方

のその先には、極楽浄土はないうし示唆しているように思う。

開発という虚構

原発は過疎脱却、開発、発展といいつてを表向きの看板にして過疎地に押し寄せる。しかし、そもそも「開発」とは何なのだろうか。「開発」というのは、本来ならば地域の発展になるというイメージを持つが、「開発」は逆に地域とそこに住む人々を開発資金にし、開発難民にするといいつてことを予見した人として、六ヶ所村元村長寺下力三郎氏の姿を紹介したい。

青森県六ヶ所村は、国策であるプルトゥラムサイクルの中核として全国原発から核廃棄物が集積され、再処理を行うと予定されている土地であるが、その始まりは一九六九年、むつ小川原開発といいつて国家プロジェクトといいつての巨大開発であった。その国家プロジェクトである巨大開発に、現職の村長として彼は「否」を言った。

一九七三年七月十一日、衆議院建設委員会公聴会で彼は反対意見として巨大開発の本質を次のように述べている。

地震とか津波のように村を襲った巨大開発は、村ぐるみ人ぐるみ飲み込もうとしている。私どもは開発難民にならぬため必死の努力をしている。それは生きるための国家プロジェクトである巨大開発に、現職の村長として彼は「否」を言った。

一九七一年七月十二日、衆議院建設委員会公聴会で彼は反対意見として巨大開発の本質を次のように述べている。

地震とか津波のように村を襲った巨大開発は、村ぐるみ人ぐるみ飲み込もうとしている。私どもは開発難民にならぬため必死の努力をしている。それは生きるための努力であり、生きる権利の主張



である。村長といいつて住民の暮らして命を守ることは行政、政治の原点であるが、これを無視して「押し」的に進められているのが、巨大開発である。六ヶ所村で生きる農漁民といいつて、土地と水は生活の基盤だが、工業開発も土地と水を最大限に収奪しなければ成立しない。企業の利潤追求の原則は、土地と水を最大限に収奪しなければ貫徹しない。さういいつて工業開発の本質が歴然としている。かつての大陸侵略と手口が似ている。取意

彼は戦時中、朝鮮半島に渡り、朝鮮窒素 水俣病を引き起こした新日本窒素の前身に採用されている。その朝鮮半島で現地の人々を難民にし、その人々の犠牲のつえに日本の発展繁栄を構築する国策の実態を経験していた。そして「こんなところになると大変なことになる」と思い、一年で帰国し群馬県の山間部で養蚕教師として働くことになる。そこで知ったのが、足尾鉍毒事件と田中正造の闘いであったといいつて。彼はそれらの経験によりて巨大プロジェクトが来るよ、なぜ自分たちが貧乏になるのかといいつて仕組み構造を熟知していたのである。

この国の開発は、常にその主体が大企業と政府官僚、そして一部の地方有力者に主体があり、決して地方自治体にはなかった。その結果、地方の開発を目的にしなから、実際は境界をさらに境界化し、中央に資本を蓄積し、中央を温存させてきた。戦前「大陸侵略」といいつて方向をとった日本の近代化は敗戦によつて終わらず、戦後は国内に「収奪可能」の地を求めて、戦前と同じ構造で、「開発」といいつて侵略「地方の植民地化」を国家的に敢行したものが巨大開発であったといいつてみる。

さういいつて開発の虚構を、彼は現職の村長といいつて見抜き、「否」といいつた希有の政治家であり、その背景に戦前の国策「侵略戦争」に対する加害者としての痛みと、人間としての責任性を持っていた。

巨大開発、核燃サイクルに反対の姿勢を貫いた彼は、一九九五年四月十六日、フランスから高レベル放射性廃棄物が六ヶ所村に搬入された時、凍りつくような雨に打たれながら、終生つきまとつて人間の業を村が引き受けてしまった…と寂しそうにポツリともらしたといいつて。